

---

# あの、何？え、勇者の供？

耀夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの、何？え、勇者の供？

### 【Nコード】

N7285Y

### 【作者名】

耀夜

### 【あらすじ】

押入れの中から現れたのは自分たちの執事だと名乗る男と、將軍を名乗る女。親に捨てられた俺らに「貴方様方はこの国の跡継ぎです」と言う。この国、ってどこにあるんだよ。そして自らの出生と親の秘密を明かされ、王子様と従者と共に何故か魔王を倒すことに

.....

## いち

白で黒で赤で青で紫で橙で翡翠で桃で？で黄緑で群青で茶ですべての色だった。

最早何を言っているのかも分からない。てかわかんねえんだよ。

生まれた時から親に三つ子共々捨てられ、園田って言う婆さん家に引き取られ、まあお金持ちのせいかなレらのことを実の娘息子同然に育ててくれている。現在64歳。ま、そんなことはどうでもいい。しかもいきなり何か変なところに連れてこられてさー、何だ。寝てたはずなのに。

『世界が終焉の時を刻もうとしている。汝、世界の終を望まぬ者よ』  
世界？そんなもの勝手に終わってくれ。俺そんなもん選ばれてもねえし。

『大樹は音琴を奏で、地は破れる』

へえー、そう、だから何だ。

『終焉が始まりか続きを見る娘、傍観者でありながら汝に手をかす者、汝と共に世界を変える者達。神に愛された子よ』

神、そりゃ愛されてるだろうよ。娘二人と息子を寒空の下（真冬に）公園に置き去りにしても良心が痛まない親のところに生んでくれてな！。

『選べ』

何を？知らない人と金貸しには『はい』って言うなってしつけられたんだが。

『その他多くの力なき者と共に滅ぶか、・・・となるか』

「うっせえな。分かったよ。やる。だからさっさと俺の夢から出てけ」

めんどくせえ。

「何を一人で言ってるんだい？」

「は？」

「大丈夫です。きっと脳までカビが発生してきたんですよ」

ぐらりと視界が揺れもとに戻った。

ミンミンと鳴く蝉。今は比較的涼しいため節電も兼ねて扇風機。テレビから聞こえるアナウンサーのニュースを伝える声。

「え、と」

「どつした？具合でも悪いか」

二番目の妹の梓あずさがコーラのプルタブを開け俺に手渡した。

よく冷えている。今更ながら気持ちの悪い汗でベトベトするのが嫌だが。

「いや、変な夢見てた」

「変？」

夢など常に変だ。どこもかしこも変なのに今更夢が変とはって顔してる。

「まあ、そんな事はいいいから部屋の掃除でもしておきなさい。晴子さんばかりに頼むのはよくありませんし」

着物を着ていなくても何処か和な気配を漂わせている。このおばあちゃんの良いところは必要最低限のことは自分でさせるところだ。

いい年して自炊のできない大人なんぞにはなりたくもない。

其の忠告を軽く受け止め、妹達と共に上へ上へ。

二十畳はあると思われるフローリング。

「めんどくさい」

一番年下である妹<sup>まへ</sup>咲夜は冷静だが掃除は嫌い。何故か人の家の掃除によく借り出されるんだが……

使わない本を縛り、何故かピンクでフリフリのソックスが出てき咲夜が無言でどこぞに持っていった。腐りかけの何かや黒い生命体（丸めた新聞紙で中身が見えない程度に梓が殺った）などの他に大したものが出なかった。そして一応掃除機をかける。

「おーわりー」

「押入れは？」

妙なことを聞いてきた。押入れなどいつもほったらかしなのに。

「んじゃ、ついでにそこもやるか」

梓はテレビを見ながらブーブー文句を言ったがまだお気に入り番組は始まらずニュースの途中だったので面倒くさ気にやってきた。

『岡山県三井市で竜巻が発生し、男女三人が死亡しました』

あまり気にせず咲夜は押入れの戸を引いた。

「あれ？」

開かない。

「ちょっと手伝いなさいよ幸輝しんき」

「そう言うあなた様も手伝ってはいかがですか」

「バレた」

「はじめからバレてんだろ。っの、ひ・ら・けよおあ!？」

つつかえ棒がしてあるのではないかと疑ったが目の前に広がるのは断じて押入れの木の台と漆喰ではない。

二段で出来た押入れ。その下の段には思ったとおり整理整頓された荷物があるが問題は上の段。

何故か鉄で出来た階段があり何故か女が座っていた。

薄紫の瞳は退屈な光を宿し、腰まで伸びている髪は栗色。極めつけは格好だ。

あのRPGみたいな鎧?を腰のちよつと上らへんまでの長さで多分鋼、だと思いが身に付け腰にもそんな感じの鎧で足もブーツみたいな野を履いている女だ。

あちらはニコリともせずこちらを見ている。冷や汗で手が滑る。沈黙が痛くて何も言えないし目が痛くなってきた。

どうしろと?こんな場面のスルースキルなんぞもってない。

「どうしたんですか」

不審に思った咲夜がひょいと覗くとその女性の目が輝いた。待て、これはやばい気がする。

「お迎えに参りました。と言えと何度言えは分かるんですか」

目を輝かした女性を押しつけ執事服の初老の男性が出てきた。あの、どうやって？

梓は金魚のように口をパクパクしている。このような状況で一般人らしい対応だ。たぶん。

「お初にお目にかかりますな、姫、王子、遅くなりましたがお迎えに参りました」

目があった瞬間体に電撃が走ったような衝撃がきた。理性ではなく本能が同族だと感じ、咲夜が目を見開く。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7285y/>

---

あの、何？え、勇者の供？

2011年11月21日22時48分発行